

2018 年 10 月 11 日～2019 年 1 月 20 日

※作品は都合により一部展示替えを行うことがあります。

展示室 1 自然との対話

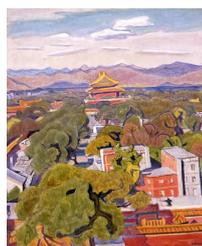
J. M. W. ターナー
(カンバーランド州のコールダー・ブリッジ)

18 世紀末から 19 世紀前半にかけて、イギリスでは風景画が大きく発展しました。イタリアやフランスへの海外旅行「グランド・ツアー」の流行などを経て、イギリス国内の自然に対する関心が高まると、画家たちは自分自身の眼でイギリスの自然の景観を見出し、風景画として描くようになりました。産業革命によって画材の技術改良、量産がすすむと、移ろいやすい自然の表情を描き留めるのに水彩画も好んで描かれました。

やがて、19 世紀末に「自然に忠実であれ」と提唱した美術批評家・思想家のジョン・ラスキンの自然観は、当時のイギリス画壇にも大きく影響を及ぼすことになりました。

作者名	作品名	制作年	技法・材質
アレクサンダー・カズンズ	川岸に神殿のある風景		水彩・紙
トマス・ゲインズボロ	荷馬車のいる丘陵地帯の森の風景	1745-46 頃	油彩・キャンバス
ジョン・マーティン	フレッシュウォーター・ベイ	1815 頃	油彩・キャンバス
ジェームズ・ウォード	アドニス	1823-4	リトグラフ・紙
ジョン・セル・コットマン	フェカンのロマネスク遺跡		鉛筆・紙
ジョン・クローム	ヘレスドンの眺め	1807 頃	油彩・キャンバス
ジョゼフ・マロード・ウィリアム・ターナー	カンバーランド州のコールダー・ブリッジ	1810	油彩・キャンバス
ジョン・コンスタブル	デダムの谷	1802	油彩・紙、キャンバス
ピーター・デ・ウィント	ウィットビー		水彩・紙
トマス・マイルズ・リチャードソン・ジュニア	コンウェイ城の日没	1855	水彩・紙
ディヴィッド・コックス	川辺の騎士と人物	1850	水彩、鉛筆、チョーク・紙
ジョン・ラスキン	オーヴェルニュの丘		鉛筆、ホワイトボディカラー・紙
ジェームズ・アボット・マクニール・ホイッスラー	早朝	1878	リトチント・紙
アルバート・グッドウィン	エンゲルベルク		ペン、水彩・紙 佐藤克也氏寄贈
サー・エドワード・コリー・バーン＝ジョーンズ	フローラ	1868-84	油彩・キャンバス
ジョン・ウォーターハウス	フローラ		油彩・キャンバス
サー・エドワード・コリー・バーン＝ジョーンズ	『フラワー・ブック』より	1905	リトグラフ・紙／ポートフォリオ
サー・ジョシュア・レイノルズ	キティ・フィッシャーの肖像習作	1760-62	油彩・キャンバス
サー・ジョシュア・レイノルズ	エグリントン伯爵夫人、ジェーンの肖像	1777	油彩・キャンバス
トマス・ゲインズボロ	オース夫人の肖像	1767	油彩・キャンバス
ウィリアム・ブレイク	ヴァージルの『田園詩』第 1 巻		木口木版、ラインエングレーヴィング／本
サミュエル・パーマー	ヴァージルの『田園詩』	1883	エッチング／本

展示室 2 近代洋画の眼



安井曾太郎《北京風景》

明治時代、日本は西洋文明を受け入れ、近代化を進めました。絵画の世界においても、「日本画」と呼ばれるこれまでの絵画とは大きく異なる、西洋の表現様式（科学的な遠近法、明暗法など）、画材（油絵の具、キャンバスなど）を用いた「洋画」が生み出されました。

洋画の誕生は、単に西洋風の絵画の成立ばかりではなく、日本人の外界の認識や視覚にも変化をもたらしました。近代洋画史に偉大な足跡を残した安井曾太郎は、自然のもつ構造的な力を線描によって抽出させるなど、「安井様式」と呼ばれる独自の画風を生み出しました。

ここでは、洋画家たちの「眼」をとおして、日本近代における世界観を探ります。

作者名	作品名	制作年	技法・材質
諫山麗吉	神戸付近の風景		油彩・キャンバス
五百城文哉	真如堂図	1897 (明治 30)	油彩・紙
黒田清輝	東久世伯肖像エスキース	1894 (明治 27)	油彩・キャンバス
伊藤快彦	子供像		油彩・キャンバス
有島生馬	少女	1908 (明治 41)	油彩・キャンバス
吉田 博	積み藁のある風景		水彩・紙
栗原忠二	風景 (ヨーロッパ風景)		油彩・キャンバス
南 薫造	雪の日の東京	1933 (昭和 8)	油彩・スケッチボード
小山敬三	裸婦立像	1920 - 22 (大正 9 - 11) 頃	油彩・キャンバス
伊原宇三郎	靴職人	1925 - 9 (大正 14 - 昭和 4) 頃	油彩・キャンバス
安井曾太郎	初秋の北京	1944 (昭和 19)	油彩・キャンバス
安井曾太郎	バルコニーより		水彩、鉛筆・紙
安井曾太郎	公園風景	1928 (昭和 3)	水彩・紙
梅原龍三郎	静物		油彩・キャンバス
棟方志功	愛染菩薩図 (「雨ニモ負ケズ」四韻)		墨、淡彩・紙 / 4点組
松本竣介	窓	1935 (昭和 10) 頃	油彩・合板に紙 武田光司コレクション寄贈
内田 巖	佃風景	1928 (昭和 3)	油彩・キャンバス
内田 巖	首飾りの女	1937 (昭和 12) 頃	油彩・キャンバス
木村荘八	祖母の顔	1916 (大正 5)	油彩・板
河野通勢	ホレブの岩		油彩・板
中川一政	冬の郊外 (葱畑)	1918 (大正 7) 頃	油彩・キャンバス
小出檜重	自画像	1918 (大正 7)	油彩・キャンバス
恩地孝四郎	黒い机	1922 (大正 11)	油彩・キャンバス
片多徳郎	残雪の庭	1925 (大正 14)	油彩・キャンバス

展示室3 戦後・画家の試み



土橋 醇

《タルヌ峡谷のコンポジション》

第二次世界大戦後、社会構造や価値観の大きな変革の中で、画家たちはさまざまな表現に挑み始めました。不条理な戦争への怒りや深刻な社会状況をテーマにした作品が生まれる一方、1950年代にはアメリカやヨーロッパで起こった自由な形体と色彩による抽象表現やアンフォルメルなどの新しい絵画が盛んになります。多くの画家たちは、自分の思い描く世界を自由に表現しその可能性を模索していきました。

今回は、戦後から現在にいたる多様な美術作品を紹介します。

作者名	作品名	制作年	技法・材質
今井俊満	コンポジション 23	1959 (昭和 34)	油彩・キャンバス
堂本尚郎	1962-18 (二元的なアンサンブル)	1962 (昭和 37)	油彩・キャンバス
田淵安一	ラ・セーヴ (樹の精)	1957 (昭和 32)	油彩・キャンバス
土橋 醇	タルヌ峡谷のコンポジション	1957 (昭和 32)	油彩・キャンバス
佐藤昭一	コンポジション	1959 (昭和 34)	油彩・キャンバス
菅井 汲	黒	1959 (昭和 34)	油彩・キャンバス
瑛九	構図	1957 (昭和 32)	エアブラシ・合板
野地正記	宇宙人の争い	1960 代 - 80	油彩・板
鎌田正蔵	祝日 (B)	1966 (昭和 41)	油彩・キャンバス
深沢軍治	庭先植物生態学 (B)	1984 (昭和 59)	油彩・キャンバス
勝呂 忠	浮遊する三本の線	1989 (平成元)	油彩・キャンバス
ウィリアム・スコット	静物 II	1957	水彩、コラージュ・紙
ヴィクター・パスモア	ワインレッド (version1)	1964	レリーフペインティング・パネル
ベン・ニコルソン	水差しと楕円形	1973	オイルウオッシュ、鉛筆、紙、木製ボード
ウィリアム・スコット	水差しの詩 No. 14	1980	油彩・キャンバス

展示室4 『HANGA』特集



『HANGA』第巻輯表紙

世界に誇る浮世絵版画は、絵師、彫師、摺師の共同作業によって作品が生み出されました。こうした木版画の伝統に加え、西洋からもたらされた銅版画や石版画などの多彩な技法も含め、作者自らが描いた下絵を版にして摺るという自画自刻自摺を掲げた創作版画運動が大正から昭和戦前期に大きな動きとなって、日本の近代版画の隆盛期を迎えました。

またこの時代には、版画に関する情報等とともに作品が掲載された版画誌が次々と刊行され、それらは作家にとって重要な発表の場となりました。今回はそのうちのひとつ『HANGA』を特集します。

作者名	作品名	制作年	技法・材質
川上澄生他	『HANGA』第巻輯	1924 (大正13)	紙／ポートフォリオ
石井鶴三他	『HANGA』第二輯	1924 (大正13)	紙／ポートフォリオ
萬鉄五郎他	『HANGA』第参輯	1924 (大正13)	紙／ポートフォリオ
川崎巨泉他	『HANGA』第四輯	1924 (大正13)	紙／ポートフォリオ
恩地孝四郎他	『HANGA』第五輯	1925 (大正14)	紙／ポートフォリオ
旭 正秀他	『HANGA』第六輯	1925 (大正14)	紙／ポートフォリオ
平塚運一他	『HANGA』第七輯	1925 (大正14)	紙／ポートフォリオ
川西 英他	『HANGA』第八輯	1925 (大正14)	紙／ポートフォリオ
山口 進他	『HANGA』第九、拾輯	1926 (大正15)	紙／ポートフォリオ
深沢索一他	『HANGA』第十一輯	1926 (大正15)	紙／ポートフォリオ
永瀬義郎他	『HANGA』第十二輯	1927 (昭和2)	紙／ポートフォリオ

(『HANGA』所収以外の作品から)

南 薫造	浦の漁灯	1913 (大正2)	木版・紙
谷中安規	鍵 (詩画集の8)	1933 (昭和8)	木版・紙
有島生馬	ハノヴィン祭 (ハロウィン)	1936 (昭和11)	エッチング・紙
安井曾太郎	少女と大このはづく	1939 (昭和14)	リトグラフ・紙

展示室4 佐藤潤四郎と仏足跡



佐藤潤四郎
《仏足跡と2人のガラスの神様》

郡山市出身のガラス工芸家・佐藤潤四郎(1907～1988)の業績として挙げられるのが、白鳳文化を代表する名刹・薬師寺の伽藍復興事業における舍利器の制作です。潤四郎はこの仕事とおし、薬師寺の大講堂内に安置されている「仏足石」(国宝)に惹かれました。「仏足石」とは釈迦(シャカ)の足跡、すなわち「仏足跡」を刻んだ石のことで、足形の内側には輪軸や卍、さらには魚などの文様が施されています。潤四郎は、これらをガラスや陶器作品の文様として用いるとともに、絵画作品でも多くの仏足跡を描いています。晩年に多い魚の造形は、仏足跡の文様からの発想とされています。

作者名	作品名	制作年	技法・材質	
佐藤潤四郎	自画像と仏足跡	1984 (昭和59)	墨・紙	佐藤久枝氏寄贈
佐藤潤四郎	仏足跡の中の窯		水彩・紙	佐藤久枝氏寄贈
佐藤潤四郎	仏足跡・ガラス工具曼荼羅		水彩・紙	佐藤久枝氏寄贈
佐藤潤四郎	スタンドグラス・仏足跡		ガラス、鉄	佐藤久枝氏寄贈
佐藤潤四郎	奈良・薬師寺西塔舍利器 (試作)	1978 (昭和53)	ガラス／宙吹き・グラヴェール	
佐藤潤四郎	奈良・薬師寺玄奘三蔵院舍利器 (控) No.1	1980 (昭和55)	ガラス／宙吹き・カット	
佐藤潤四郎	奈良・薬師寺玄奘三蔵院舍利器カバー (控) No.1	1984 (昭和59)	ガラス／宙吹き・ブランツ、雲母封入	
佐藤潤四郎	花器・仏足跡ロータス		ガラス／宙吹き・サンドブラスト	佐藤久枝氏寄贈
佐藤潤四郎	オブジェ・仏足跡	1984 (昭和59)	放射能遮蔽ガラス／サンドブラスト	佐藤久枝氏寄贈

作者名	作品名	制作年	技法・材質	
佐藤潤四郎	オブジェ・仏足跡ロータス	1984 (昭和 59)	ガラス/エッチング、サンドブラスト	
佐藤潤四郎	魚拓		ガラス/宙吹き	
佐藤潤四郎	魚拓		ガラス/宙吹き・カレット封入	
佐藤潤四郎	水指 (魚)		ガラス/型吹き	
佐藤潤四郎	陶器で仏足跡 (顔)		陶器	大方竜子氏寄贈
佐藤潤四郎	蓮の花と押し葉と仏足跡		水彩、墨、コラージュ・紙	佐藤久枝氏寄贈
佐藤潤四郎	ヨットを浮かべた仏足跡		水彩・紙	佐藤久枝氏寄贈
佐藤潤四郎	仏足跡に隠れるガラスの神様		水彩、墨・紙	佐藤久枝氏寄贈
佐藤潤四郎	人面仏足跡 1		墨・紙	佐藤久枝氏寄贈
佐藤潤四郎	人面仏足跡 2		水彩、墨・紙	佐藤久枝氏寄贈
佐藤潤四郎	陶板・仏足跡 1		陶器	大方竜子氏寄贈
佐藤潤四郎	陶板・仏足跡 2		陶器	大方竜子氏寄贈
佐藤潤四郎	陶板・仏足跡、五輪塔		陶器	大方竜子氏寄贈
佐藤潤四郎	仏足跡と 2 人のガラスの神様		水彩、木炭・紙	佐藤久枝氏寄贈
佐藤潤四郎	仏足跡と 3 人のガラスの神様		水彩・紙	佐藤久枝氏寄贈

ロビー展示 彫刻・他

作者名	作品名	制作年	技法・材質	
● 1 階				
細川宗英	装飾古墳シリーズ 9	1963 (昭和 38)	セメント	細川明子氏寄贈
笠置季男	躍進	1958 (昭和 33)	セメント	
アントニー・ゴームリー	量子雲 XXIII	2000	ステンレス・スチール棒	
アントニー・ゴームリー	領域 XIII	2000	ステンレス・スチール棒	
● 2 階展示ロビー				
舟越保武	少女	1956 (昭和 31)	砂岩	
佐藤忠良	群馬の人	1952 (昭和 27)	ブロンズ	
高田博厚	アラン像	1932 (昭和 7)	ブロンズ	
木内 克	女の顔	1965 (昭和 40)	石膏、顔料	和田敏文氏寄贈
バリー・フラナガン	野兎と鐘	1988	ブロンズ	